

報告①

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(上)

町立に移管した島の高校に着任して考えた課題と方針

——全国募集と地域との協働——

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域学校協働、町立移管、まなびじま奥尻、町おこし、総合的な探究の時間、小さい学校、地域人材、持続可能な地域社会

北海道奥尻高等学校は道立から町立に移管した高校である。清水信彦校長は二〇一九年四月に町立移管後の第二代目の校長として赴任した。リーダーシップと行動力を発揮し、二〇一六年に町立に移管した奥尻高校の高校魅力化の推進・発展と正面から向かい合い、地域との協働を行う高校のモデルとなるような実践を行っている。インタビューでは、着任してから見えたことは何か、これから奥尻高校が取り組む課題は何か語っていた。

奥尻高校は町立への移管をきっかけに、「生徒が満足する教育を受けられる」学校を目指して、文字通りの意味で町全体の協力を得て、高校魅力化、まなびじま奥尻プロジェクト、全国募集、寮の建設などが次々と実施された。

卒業生の進路は、以前の進学率が、三〇%〜四〇%だったところが、

今は七〇%ぐらいまで増えており、ここ数年、国公立大学へも進学している。

島に帰って来る生徒を育てたいというのが、高校の取り組みの重要な目標であり、戻ってこなくても奥尻の良さを伝えてくれれば島を盛り上げることにつながる、と考えている。

奥尻高校は町立移管し、「せっかく残すのであれば、生徒が満足な教育を受けられるような学校」にするために、高校の教育活動の充実を検討した。六つの課題が浮かび上がり、それらの課題を解決するため、まなびじま奥尻プロジェクトが立ち上げられた。インタビューではそれぞれの課題について語られている。印象的であったのは、昨年と同じことをやっても衰退する、現状維持ではなく新たな発想で挑戦する、ということが学校全体に浸透しているとの語りがあったことである。

奥尻高校の場合、新しいことをするために新しいことをしたのではない。新しいことへの挑戦は、壮大な理想への挑戦やまったくもって新しいことへの挑戦として語られるのではなく、町立に移管して町民と生徒が町の課題に取り組む中で自然の流れで取り組んだことが結果的に新しいことに挑戦したことになったということである。

地域の課題と高校の課題が交差したところで協働する高校魅力化が、地域を活性化し、活性化しつつある地域からエネルギーを貰って「生徒が満足する学校」が作られていく、ということが起きている。

奥尻高校の場合、道立高校が町立に移管したことが高校と地域の関係が変わるきっかけとなった。そして、小さい学校であったことが奥尻高校のフットワークを軽くしている。

1 奥尻高等学校の概要と町立移管のインパクト

——それではお願いいたします。まず、学校のことを簡単に紹介して下さい。多くの人は、町立へ移行するということが意味がわかりにくいと思いますので。「道立から町立に移管することで、どのようなことが起きたのか」教えていただけますでしょうか？

清水信彦校長…これは私が赴任する前の話ですが、最初は人口減で、高校の存続問題に直面していました。「道立のままだと、奥尻高校の存続が危うい」と。それで、全国的にもあまり例を見ない、道立から町立への移管を選択したと聞いています。これはもちろん、町長、教育長、

町立移管前の三人の校長を中心に話をしながら、進められていきました。それで、町内から高校がなくなるということは、島にとっても大きなダメージになるという判断で、町立移管したということです。

移管当時の関係者がただ高校を残すだけではだめで、せっかく残すのであれば、生徒が満足な教育を受けられるような学校にしたいということと、「奥尻高校魅力化づくり」をしつかり考えられていました。学校の教育活動の充実が必要ということで、奥尻高校と奥尻島の課題について整理をして、それを解決しようということで「まなびじま奥尻プロジェクト」が立ち上がりました。今もそれを継続しつつ、常に新しい取り組みを付け加えながら、最先端の教育を進めているということです。

「学校だけではなく、地域の教育力を活かして教育活動を進めよう」という方針で、島全体の町民の方々に協力いただいて、「島全体で、生徒を教育しよう」と考えて、町長をはじめ、町役場や教育委員会、各産業の専門家らのところに協力を仰いだのが一番最初のスタートです。町の方々が、すぐく理解してくださって、「みんなで協力しようや」というような形で、「町全体の協力があったおかげで」ということが、一番かなと思っています。

町の大多数が賛同して一つの方向に向かっているというのが、大きいですね。

全国から生徒（以下、「島留学生」という）募集しているなかで、「募集したのはいいけど、生徒が住むところがない」という現状から、当初はまずは住むところの確保から始まっています。

最初は、奥尻島にある民宿に依頼し、島留学生を分宿させる方法をとって、今の二年生と三年生の島留学生は、一、二人ずつ民宿に下宿とい



清水信彦校長

うかたちで住んでいます。

ただ、それでも一年生の入る下宿が足りなくなつたので、「寮を建設しなければいけない」とのこと、町が寮建設に踏み切つたというのは、すごく大きいことだと思えます。

—— 大きいですね。

清水校長…今年の三月には二〇名定員の寮ができました。そして、さらに二二部屋増築することが決まつたので、全部で四二名定員の寮となります。

—— 「学校、生徒、地域の状況と特徴」はどのようになりますでしょうか？

清水校長…学校と地域との取り組みの中で特徴的なものは、「町おこしワークショップ」という取り組みで、地域の課題を発見して、それを解決するために地域の方々に助言をいただきながら、共に解決策を考え、最後には発表するものがあります。

奥尻島にはすべての産業が揃っていましたが、地元の後継者を育てる農林業や水産業、観光業などについて学ぶ機会がありませんでした。これからは、島の人的、物的な教育資源を有効に活用するというのが大事な時代なので、町の人の協力を取り込んで重要な取り組みとして行っています。

—— 町立に移管するときに、そのあたりのことが話し合われたという

ことなのでしょうが？

清水校長…そうですね。町立に移管して、「ただ学校を存続しただけでは意味がない」ということから、「それなら、奥尻高校ならではの最先端の教育やろう」ということで、「まずは奥尻島の課題を整理するところから始めていった」と聞いています。

2 卒業後の進路とUターン

——進路状況は、高卒後、いったん島の外へ出る生徒が多いのでしょうか？ それとも、卒業後、そのまま島で就業する生徒も多くなるのでしょうか？

清水校長…外に出て行く方が多いですね。島には進学先もないし、この就職先というのも限られているので、外に出て行く生徒が多いです。

昔は就職が多かったみたいですけど、最近は学力も向上してきたので、進学を目指す生徒が増えてきました。以前の進学率が、三〇パーセント、四〇パーセントだったところが、今、七〇パーセントぐらいまで増えています。ここ数年、国公立大学へも、合格しています。

——そうしますと、「いったん外に出てしまうと、帰ってこない」というようなことが心配になると思うのですけど。

清水校長…そうですね。そういう生徒、帰って来る生徒をなんとか育

てたいというのが、この取り組みの一つの目標でもあります。でも、戻ってこなくても、生活するそれぞれの場所で奥尻の良さを伝えてくれれば、直接的ではないですが、島を盛り上げることに繋がっていくのかなと思います。

——島根県立隠岐島前高校では「ブーメラン」というふうに言います。

清水校長…ブーメラン。

——あるいは、島根県立吉賀高校では「サクラマス」という表現を使って、「大きくなって戻ってくる」というようなことを考えています。

清水校長…そうですね。Uターンというか、その一度離れて大きくなって戻ってくる生徒を育てていきたいというのはありますね。

——そうですね。

清水校長…島留学生が、今年三年生で初めて卒業しますが、三人とも就職を目指しています。

——島内ですか？

清水校長…「島外での就職」です。ただ、今年の春の卒業生のなかでは、一人奥尻の観光協会に就職した生徒がいるんですよね、地元の生徒ですだけ。



今の二年生でいうと、ここで漁業体験をした時に、興味関心を持ちまして、「漁師になりたい」という生徒が三人もいるんですね。その生徒のなかでは、もしかしたら奥尻に残って、漁師になるというものもあるかもしれません。

なにせ、受入先がないとだめですし、すぐに漁師になれるような甘い世界でもないので、いったん外に行って勉強してから、奥尻島に戻って漁師をやるっていうこともいいですし、そういう生徒が増えてくるとすごくうれしいですね。島全体で教育しているので、町民の方も成果として実感できるのかなと思います。

3 六つの課題

課題1 地元の後継者を育てる農業・水産業。観光業等について学べない。

- ・島の農業、水産、建設、土木、発電、地熱施設や人材の活用
- ・島外の講師の活用
- ・観光業に貢献する英会話教室の開講
- ・外部関係機関との連携による体験学習、共同研究
- ・学校設定科目「理科学研究」による探究学習

——いただいた資料で奥尻高校には六つの課題があるとうかがいました。順にお話しさせていただいてよろしいでしょうか。

清水校長…はい。

——課題1が、「地元の後継者を育てる農業、水産業、観光業等について学べない」とあります。この課題への対応はどのようなことをなさっていますでしょうか？

清水校長…これが先ほど言った「町おこしワークショップ」ということで。それぞれ、農林業や水産、観光など、そういう各分野の町の課題について、専門家の方々に来ていただいて、高校生と一緒に課題を共有して、そしてその解決策を高校生の目線でワークショップをやりながら考えていくという取り組みを総合的な探究の時間で取り組んでいます。

——そうすると、町の方からいろいろな話をうかがうことができ、町の課題について高校生がしっかり考えて、その解決策を町の方々と一緒に考えていって、最後はプレゼンで発信して学んでいく取り組みを行っています。

——対象は何年生になりますか？

清水校長…全校生徒です。三年間通しての取り組みです。

——探究の時間のなかでなさるといことですか？

清水校長…はい。松原という教員が立ち上げたときの担当でしたので、後ほど詳しく話が聞けるかなと思います。

課題2 地元に進学塾がなく、進学希望者を支援する社会的環境が整っていない。

- ・ 本校教諭の熱心なきめ細かい指導の継続
- ・ W i f i を活用した遠隔での講義視聴の実現
- ・ 小中も併せて英語教諭および町の A L T の活用
- ・ 島外の講師及びボランティアの活用
- ・ 出前講習の実施
- ・ スタディサプリ、到達度テストの活用

——それでは、課題の2の「地元に進学塾がなく、進学希望者を支援する社会的環境が整っていない」ですが、これは、どのような？

清水校長…そうですね。「大学進学に対応できるようなシステムをしっかり整備していかないと、やはり町に求められるような学校にはならないだろう」という課題があります。

これは島のデメリットというのでしょうか、進学塾が全くないんですよね。もちろん、大学とかもなくて。

なんとかそのハンデを解消しようということで、いろんな大学と連携して、大学教授や大学生に来てもらったりして、講演やワークショップ等を行っています。

それから、奥尻高校はwifi環境が整備されているので、進学塾がないという欠点を補うために、「Wifi二一ナー」という取り組みをしています。

これは、現役の大学生で高校生の相手になってくれる方を公募しています。そして、PC画面を通してながら、大学生との会話のなかで、大学生活について話を聞いたりあるいは、実際に受験勉強の仕方を教えてもらったり。ちょっとわからないところを聞いて、教えてもらったりしています。

最初、慶応大学の学生さんでしたね。あとは、京都大学や札幌医科大学、北海道大学も協力してもらっています。これが、すごく好評で昨年、女子生徒でWifi二一ナーやっていた生徒は、マーケティングに興味を持って、受験勉強の仕方も教えてもらって、それで、小樽商科大学に合格しました。これはすごく実績を残している取り組みなので、続けていきたいなと思っています。

——これは、学校内にあるパソコンを使つてのみ、交流ができるかたちですよ、きつと？

清水校長…そうですね。

——で、これは一対一で個人でなさってるから、できやすいのかなと思っんですけども。

私の体験では、高校の授業場面と大学の授業場面でつなごうとすると、大体、時間が合わなくてうまくできませんでした。これ、Wifi二一ナーのように個別化してしまえばよかったですね。



清水校長…そうですね。個別化したことが良かったと思います。それから、今回も、北海道大学の学生さんが、新規に入ってきましたね。大学生も一回奥尻高校とつながると、自分の後金も見つけてくれて。それでつながってるような状況ですね。

——目から鱗でした。

清水校長…あとは、英語塾もないので、「グローバル化に対応する」というところにもつながると思うんですけども、「イングリッシュサルーン」という取り組みも行っていきます。

月に三回程度ですね。三つの地区ごとに。奥尻地区と、南の空港のある青苗地区、島の西側の神威脇（かむいわき）地区の三カ所で行っています。

特に、ここでは、オールイングリッシュで「いろんな話題について英語でディスカッションする」ということをしています。ALTの先生が中心になって、旦那さんもボランティアでやってくれています。青苗には高校の寮があるので、青苗地区のときには、寮生がたくさん参加しています。あとは、町民の方々が、近くの町民の方がその会場にそれぞれ集まってきたり楽しくやっています。

——参加者は、高校生以外もいるのですか？

清水校長…中学生以上の町民の自由参加です。

——大人も？

清水校長…大人、はい。一般町民の方も参加されていて、楽しみにしているらしい町民の方がいます。月に二回、各地区でやるときもあります。今年は、二五回計画しています。

——生徒の勉強のことだけ考えたら「公設学習塾」を設置するところもあると思うのですが。こちらは？

清水校長…いや、人材確保の面と、やっぱりお金がかかるんですね。なので、それは公設塾ではなく、高校の教員でやっということ。

課題3 高等教育及び一部上場企業との接触がない

- ・ 慶應義塾大学や地域活性化をテーマに最先端の研究をしている大学との連携及び共同事業の構築

- ・ 地域活性化を推進する事業を展開している一部上場企業との連携

——それでは、課題の3に進みたいと思います。「高等教育及び一部上場企業の関係者との接触がない」ということですが、これの対策はどうされていますか？



清水校長…これは、大学ですね。最初は慶応義塾大学大学院SDMの先生方が本校に来てくれまして、本校としても町おこしワークショップ等、地域の活性化についての活動をするにあたってのご助言をいただいたところから開始されたと聞いています。それで、地域活性化をテーマにして、他の大学の先生にも講演やワークショップをしていただきました。町の事業で外部からいろんな方が島に来ているのですが、そういうときに高校にも来ていただくようにしています。

当初「地域の課題を探るのには、やはりQOL調査が必要だろう」ということで、その調査を進める時にも慶應義塾大学SDMの先生方と奥尻高校の生徒も一緒にやらせてもらいまして、「その結果分析したものを、高校生が慶応大学に行つて発表してくる」という取り組みもあつたようです。他にも最近でいうと、北海道大学大学院の教授が「奥尻高校の取り組みに、すごく感銘を受けた」ということで、すごく興味持ってくれてですね。奥尻高校の町立化についての研究論文で、「奥尻高校の取り組みは先進的でとても素晴らしい」ということを書いていただいて、それを生徒にも話してもらつたんですよね。そうなることや、奥尻高校生も、「外部の方々からこんなに褒められているんだ」、「評価されているんだ」ということで、自分の学校に誇りをもつようになりました。そのあとも、追跡調査ついでということで、北海道大学の院生さんや教授が、今年も七月の学校祭のときにも来てくれて、引き続き、奥尻高校のことを支援してもらつてます。

——個人的な関心になつてしまふんですけども、私もかれこれ六年間、ある高校さんと関わつていて。今年も八月に四泊五日で学生二〇名ほ

どとその高校を訪問して、高校生と大学生の協働探究学習活動をやったり、高校生と大学生が一緒になって地元の人の話を聞いたりとか。それで、一〇月に、今度は高校生が東京に来て、東京の各所を共同研究で訪問するというようなことをやったのですが、いずれ私が定年退職してしまつと、どうやって事業を継続していくのかということがとても気になっています。

こちらの場合は、うまい具合に、慶応の先生、次に北大の先生がいらつしゃつたということで、そういうかたちでつなぐのが一つかなというふうに今、聞きました。

清水校長・慶応大学の方とは、今でもつながっております。今年、五月ぐらいに、当時から交流を深めてくださっている先生が来てくださいました。それで、「奥尻高校はこういう取り組みをしたらいいんじゃない」とかというアドバイスを受けたりしながら、そういうつながりは持ち続けています。

——いいですね。

清水校長：はい。北海道大学も、そうですね。二回ほど来ていただいて。それで、そのあとも興味ある大学生が増えてきたので、一緒に来てくれて。本校も、学校説明会で全国いろんなところへ行っていて、函館や札幌会場に行くのですけども、札幌会場に行ったときに、その教授と学生さんの五人が来てくれて、中学生とその保護者に本校のアピールをしてきてるんですね。交流した大学側から、本校の取り組みをいろんなところでPRしてくれるという、そういうつながりもでき

ました。あとは、札幌国際大学の教授、その方も、奥尻高校のこの取り組みをすごく理解してくださつて、支援者として、月に一回ぐらい奥尻高校に来てくれるような、そんな頻度で七月まで来てくれていました。東京や大阪で学校説明会を行ったときも、一緒に来てくれて本校のPRをしてくれました。

——そのアイデアいただけます。来年、東京でのフェスタが続けば、青学の学生と一緒に、あの会場に行きます。

清水校長：とてもありがたいことです。説明会では、われわれがPRするのはもちろん大事なんですけど。支援者や周りの方から応援してくださると、すごく信憑性があつて、とても助かります。なので、自分は、島留学生の保護者の方を会場に呼んだり、生徒と一緒に行けないので、生徒は「ビデオを通して、生の声を届ける」ということで、インタビューしたものを画面を通して伝えるというような工夫をしています。

——そうですね。

清水校長：ええ。札幌会場では北海道大学の教授の方と、それから学生さんが、熱くPRしてくれたのがありがたくて、すごくよかったです。これもやはり、大学との関係がなければ、できなかつたことかなと思います。

それで、先ほど、「協働探究」とおっしゃっていたんですけども、奥尻高校は北海道大学水産学部と一緒に海の保全について研究していま

して、マリンチャレンジプログラムというのですが、奥尻島の海の磯焼け問題についての共同研究で、「磯焼け対策について、どのようにしたらいいか」というのを高校生なりに考えて、それを発表するという取り組みをやりましたね、去年、今年と。

ウニが海藻を食べてしまって、海藻がない状態を、磯焼けといいます。その状態になると、魚が寄ってこなくなるので、「何か対策はないか」「海藻を食べないように、ウニの嫌いな海藻を研究して、それをそこに植えたらいいんじゃないか」とかを考え、研究した結果を発表しました。去年は、全国で三位でした。今年も発表したんですけど、入賞にはいたらなかったんですけども、そんなことを、北海道大学水産学部の学生さんと、もちろん教授の方の助言をいただきながら研究しています。

—— いいですね。

清水校長…はい、これも、来年は教科の理科のなかで、探究学習というかたちで取り組んでいこうと思っています。

—— 探究の時間じゃなくて、教科の時間にやってらっしゃるんですか？

清水校長…教科、理科研究という学校設定科目なんですけども。そのなかでやっていこうと思っています。

—— 総合の時間、探究の時間よりも、教科の方に近づけてなさるといふことはなかなか難しい部分もあると思います。





清水校長:そうですね。今は、どの科目も学習指導要領自体がもう「探究」とうたっていますので、総合的な学習の時間だけではなくて、各教科や教科横断的に教育活動全体で行うように、「どの教科も『探究』というテーマでやる」ということで、今進んでいます。

課題4 地元の将来や発展につながる学習プログラムがスクーバダイビングしかない。

- ・次年度以降の学校設定科目「奥尻創生アプリ学」の開講に向けた準備
- ・総合的な学習の時間における学習内容への導入及びプログラムの構築

——それでは、続いて課題4について、お願いいたします。エメラルドグリーンの海というのは、あちこちで見ますけども。ここでは、奥尻ブルーと表現されています。海の色が全然違うので、それ自体が特色なのかなというふうに感じました。

清水校長:そうですね。「奥尻ブルー」と言っていますね。地元の方は「日本一きれいな奥尻ブルー」、そういう誇りを持っています。この自然を見ただけでも魅力があって、「こういうところで学びたいな」と憧れをもって入学してくる生徒もいるのかなと思います。

——次、もし来るチャンスがあったら、今度は冬に来たいと思つています。

冬の奥尻島というのはまた、きびしいのでしょゆけども、別の魅力があるのかなというふうに。

清水校長：ただ、私もまだ冬を過ごしてないのですけど、島の方は「冬は何もない」と言うんですね。「過ごすのにもきびしい」と島の方は言っています。飛行機は飛ばみたいですけども、フェリーが欠航すると、やはり島に物がなくなるよう、一軒コンビニがあるのですが、「コンビニの売り物もなくなるような状態で、きびしくなる」って言っていました。

「冬をどう過ごすか」というのが、奥尻島の永遠の課題みたいですかね。

——そうですね。ぜひ、それを体験しにきたいと思つています。

清水校長：本校の大きな特色の一つにスクーバダイビングがあります。ただ、「将来につながる学習プログラムというのを、どんどん増やそう」ということで、情報科目で、学校設定科目の「奥尻創生アプリ学」を導入して、「情報で、地域に役に立つようなアプリを開発しよう」というようなことも教科、学校設定科目の中で今、やり始めてます。

最初は、魅力を伝えるようなものを何かつくってみたりしました。今やってる途中なので、まだ完成品はできてないですけども。「役に立つようなアプリをつくらう」という目的で行っています。

課題5 生徒が町のイベントの企画・運営に協力する十分な体制が構築されていない。

- ・朝のSHR前の時間や、昼休みの活用
- ・四五分七時間授業による総合的な学習の時間の増量
- ・教育課程上の位置付けの明確化
- ・地域の将来や発展につながる学習プログラムの創出
- ・町のイベントの質的向上を図るための生徒による企画・提案の機会を設定

——それでは、課題の5をお願いします。

清水校長：はい。「生徒が町のイベントの企画・運営に協力する十分な体制」ですが、昔は、高校生が町のイベントに携わるといことは、ほとんどなかったようです。

でも、「町おこしワークショップ」の観光や祭りという分野で、「課題を見つけて、それを解決する」という取り組みをやっています。町には三大祭りがあり、その祭りのイベントの内容がほぼ毎年一緒で、マナーリ化しています。そこで、「祭のおもしろいイベントを考えよう」と町おこしワークショップのなかで、観光協会の方と一緒に考えて、そして、つい先日ですが、「なべつる祭」というものがありまして、海洋研修センターの裏に大きなスペースがあるので、そこで祭が行われます。そこで、そのイベントのなかで、ゲーム的な要素のもので、例年はビンゴ大会とかやっているんですが、「それ以外の、なにかおもしろい企画はないか？」ということ、足つぽを並べて、なわとびで



そこをリレーするような、「なわとび足つぼりリレー」というふうに名前をつけて、それを高校生が企画して、町の観光協会の方に提案したら実現したというようなことが今回ありました。今年、町おこしワークショップでは、課題解決のための案を考えるだけではなくて、それを実現ということで、アクションプランというか、今年は「実現まで持っていこう」、「昨年よりもさらに」ということでやっています。その実現例として、町のイベントに高校生が参加することも含め、今は企画まで携わってきている状況です。

課題6 部活動や大会で外に出ることは多いが、島外の高校生が島に来ることがない。

- ・ 体育文化後援会の寄付金徴収及び還元
 - ・ 遠征先の関連機関からの援助申請
 - ・ 他校からの合宿の誘致、町内施設の有効活用
 - ・ 一流講師を招いての他校合同の合宿の開催
 - ・ クラウドファンディングの流れを受け継いだOIDの活動
- ※OIDは部活動に位置づけられており、Okushiri Innovation Division（オクシリイノベーション事業部）の略。

——課題の6は、どうなりますでしょうか？

清水校長…やはり奥尻島にいくと、遠征には出ますけど、フェリー代

が余計にかかるので、周りから島には来ないですよ。奥尻高校に練習試合に、島外から生徒が来ないというのがあって、それを、「島外の高校生が島に来ることがないので、何とか呼べないか」という課題もあって取り組んだのですが、これちよつと話が長くなるかもしれないですね。

クラウドファンディングを二年前にやっただけですよ。それは、「部活動の遠征費がどうしてもかかるので、何とか練習試合を多くさせるためには、その遠征費を自分たちで集めよう」という企画を、高校生が提案したんです。高校生が立ち上がって、クラウドファンディングでお金を集めました。その返礼品として、自分たちで作ったTシャツを送るということをやっただけです。それで百数十万円というお金がたまると、そのお金を部活動を支援する部活動費ということで遠征費に充てたりしました。

その逆に、「島の外から呼ぼう」ということで、昨年野球部が今年の夏の全道大会決勝まで行った札幌国際情報高校や札幌の月寒高校や、静内高校を呼んで、一〇〇名近くで、夏休みに合宿をしました。宿泊費とかをかけたために、町民センターに宿泊してもらって、「宿泊代が浮くので、フリー代かけても来てくれるだろう」ということで呼んだようです。

そうするとやっぱり、奥尻高校に一〇〇人もの野球部の生徒が来るということ、町も活性化するわけじゃないですけど、人を呼べる島になったし、それから、向こうも宿泊費が浮くので、奥尻島に来て普通に合宿できるような、そんな体制も整えることができました。

ただ、これは、町民センターを借りるのに、やっぱり町の協力がなければだめなので、島全体で受け入れるような、そんなかたちでの課



題解決をしました。今年は「津波サミット」スタディツアーの受入があるのですが、実現はできなかったんですけど、来年はその津波サミットがないので、すでに来年度は何校か来るという話があって、今の段階でもう計画しているところです。

4 フットワークの軽さ

——課題1から課題6までをうかがっていて、すごく印象的なのは、「フットワークが軽い」ということです。

清水校長…そうですね。

——校長先生も、これまでいろいろな高校を見聞きしてこられたと思うんですけども。

「このフットワークの軽さというのは、実感としてはどうでしょうか」ということと、「どうして、そういうふうに軽くできるんでしょうか」ということをお願いします。

清水校長…やっぱり、小さな学校、小規模の学校で、小回りが良くということですよ。

あとは、一番は道立から町立に移管したことで、島民の方々が「やはり町で高校を守らなければいけない」ということが浸透してまして、何をやるにしても、周りの理解を得られるということがすごく大きいなどという感じはします。

何より、立ち上げ当時の校長の発想力やリーダーシップであったり、

そういう部分があれば絶対動かない話なので、それに協力する教員が、みんな初任で若い教員がたくさんいるんですけども、やはりその若いエネルギーが、どんどん進めていける原動力のかなと思います。今年も様々な新しい取り組みに挑戦しているんですが、若い教員が「やります」みたいな、そういう賛同を得て、「じゃあ、自分たちでできることは何があるか」とかかって積極的に参加するという、そういう体制があるからこそできるのかなと思います。

——清水先生自身は、「この高校がこういう高校である」ということを理解したうえで赴任されたのでしょうか。

清水校長…全てを知っていたわけではないですが、この「まなびま奥尻プロジェクト」というのはメディアに出ていましたので、「先進的な取り組みをしている高校だな」という印象で赴任しました。大まかな概要しか知りませんでしたが、これだけの最先端の教育を一気にやっているような学校というのはなかなかないので、「すごい学校」という印象で来ました。

「立ち上げるのも大変だけど、維持するのが大変だよ」ということを、周りの先輩校長から言われてですね。「しっかりと継続させるのが大きな役目として赴任するので、とても大変だけど頑張つて」と言われてプレッシャーを受けて来ましたが、何とか持続・発展させていかなければということ、今考えてやっています。

ただ、維持するのは、昨年と同じことでやっても衰退するので、それはもう、「これまでのものを受け継ぎつつ、新しいことにも挑戦して少しずつ前に進んでいく」ということを念頭に、四月からはやってき

ています。

町おこしワークショップもそうですね。課題だけを考えるだけでなく、実現に結びつけることが重要なので、一歩ずつ前進していく考えで行っています。

——そうですね。

清水校長…ええ、それを「必ず実現する」ということをステップとしてやるというようなことだったり、あるいは、学校祭にしてもそうですね。今回、昨年と大きく内容が変わったんですけど、現状維持ではなく新たな発想で挑戦するという意識は学校全体に浸透してきている状況です。なので、ほんとに「持続・発展」させることがここでの自分の最大の任務なのかなと常に思っています。

——なるほど。インタビューの内容とはずれちゃうかもしれませんが、

私がかかわっている取り組みも、自分が年齢を重ねてくると、毎年毎年新しいことをやるのは、ちょっとしんどくなります。

清水校長…はい、なります。

——で、校長先生は、初任とかの若い先生とは違ってしんどいでしょうし。それから、町の人にとっても、年をとると、変化がないことを好むような人もいると思うんですけども。そんななかで、実践されているのはすごいなと思います。

清水校長…ありがとうございます。そうですね。町の方の中にもあんまり変化を好まない方もいらっしゃいますが、勿論これまでの伝統を継承しつつ、新たなことも取り入れていくような方針でやっていきたいと考えています。

5 地域人材とは

——それでは、先に進ませていただきます。いただいたプリントにある「地域人材」についてはこれまでのお話の中で「Uターンしてほしい」、あるいは、「島のことを好きになって、外へ出て行ったあとで戻ってきてほしい」というお話があったと思うんですが、校長先生のお考えでは地域人材とは、どのような人材のことになりますでしょうか？

清水校長…「地域人材」については、「地域や社会の課題を発見して、解決につなげることができる人材」を育てようという考えを持ってます。「持続可能な社会づくりの主体者を育てよう」というコンセプトでやっています。

——いただいたメモで「地域」を「持続可能な地域社会」と言いかえてよろしいですか？

清水校長…はい、「地域社会づくりの主体者」ということで。今の高校生が将来的にはこれからの時代を引っ張っていく人材なので、なんと

校 創 自 実 創 自 実 訓 造 律 践 造 律 践

かここから地域発展に貢献できるような人物を育てたいこうということです。その取り組みのなかで、やはり「町おこしワークショップ」などの取り組みで自ら課題を発見し、解決策を考えることに取り組ませていることに意義があるのかなと思います。

——具体的な資質能力としては？

清水校長・奥尻高校で身に付く資質能力はたくさんあるんですけども、今年はこの五つに絞って、学校教育目標を踏まえて、その言葉からリンクした資質・能力を育成しようと教育をしています。

——「創造、自律、実践」。

清水校長…はい、それが校訓です。

——で、その下に五つあります。「育成を目指す資質能力」の五つの力、課題対応能力、創造力、実践力、人間関係形成能力、発信力・表現力、この言葉ですね？

清水校長…はい。そうですね。本校の学校教育目標のなかには、もうこれからの時代に必要な、具体的な資質能力というのが網羅されてました。「この五つを育てたい資質・能力の重点に」ということで、今年はずまず教育を展開しています。

——では、まだ今年始まったばかりなんですけど、どうでしょう？



清水校長…この五つの資質・能力は、私来て五カ月経ってますけど、確実に身につけてきていると思います。

——これはやはり、先ほどからの地域おこしワークショップとか、さまざまなイベント、

あるいは、津波サミットなんかを見てもそれを感じたんですけど。そっこのを通して身につけている？

清水校長…そうですね。「人間関係形成能力」を身に付けさせることにも力を入れていまして、本校ではピアサポートプログラムを年六回もやってるんですよ。中高一貫教育を行っていますので、「中高合同のピアサポート」という形で、上級生が下級生にだけでなく、高校生が中学生のメンターになりながら人間関係づくりをする取り組みも行っています。

グローバル化ということで、八月末にインドネシアから高校生の留学生が一名来まして、今、二年生のクラスに入っています。その留学生も、日本語があまり話せなくて、英語はそこそこ話せるんですけども、そういう留学生も身近に受け入れながら、グローバル化に対応できる力が身に付くのではないかと期待しているところです。

——「どのようにして育てるか」の部分で、「実践力」のところに、「独自で開発した、新防災教育プログラムの実践」とありますけども。これは、どのようなことをなさってますでしょうか？

清水校長…先ほど観ていただいた授業も防災教育の一つなんですけども。

日常と災害を「シームレス」といつてるんですけど、日常と災害をつなぎ合わせて、普段から考えていくような新防災教育プログラムということ、例えば、「どの方法で逃げたら一番時間が短縮できるか」というのを数学的な考え方で。それを、実際に体育の授業のなかで実践してみても、そして、情報の時間で分析したものを発表するというような、「数学、体育、情報」の三教科が、教科横断的に防災に関しての教育を行っています。

——具体的な資質能力の五項目を対象に、「具体的にこういうことをしよう」というのを職員の間で話し合う、あるいは、計画を作るということをなさっていらっしゃるのでしょうか？

清水校長…私が校長に赴任して、学校教育目標から生徒に身に付けさせたい五つの資質能力を明確化して、具体的にどの活動で身に付けさせるかを考えました。当然、その活動ひとつひとつに対して、職員間で話し合い、計画して行っているところです。

——「活動に対応させた方がいい」ということなんですけども。これは、「先生方に対する効果と、生徒さんに対する効果という観点からその方がよい」というふうに判断されているわけですか？

清水校長…はい、そうですね。

——先生方もこういうふうに位置づけると、自分のやることが何なのかということがわかりやすいですか？

清水校長…はい、わかりやすいと思います。ただ来年に向けては、個々の生徒に身に付けさせたい資質・能力について、改めて先生方で考え直そうかなとも思っています。

——すばらしいですね。先生方が自分で目標を立てて。そうすると、あとで自分のことも振り返れますよね？

清水校長…はい、そうですね。

——与えられた目標ではないわけですから。

清水校長…はい。なので、先生方で生徒に身に付けさせたい資質・能力を考え、取り組みひとつひとつについても、これからどういう取り組みにして生徒を育てるかを話し合っていて、そして、学校全体で一つの方向に向かう、そんな学校にしていければと思っています。

——以上で終わります。ありがとうございました。